学位論文の要約

論文題目：団地映画論－居住空間イメージの戦後史－
申請者：今井瞳良

本学位申請論文は、団地が登場する日本映画の歴史を辿っている。団地のイメージをめぐる意味付けが住むことだけでなく、身体的な実践及び、視覚性を伴っていることを広く問題化するために、団地映画を「居住空間イメージ」として分析している。

第Ⅰ部では、戦後という時空間において、「憧れ」の生活であった団地が、1960年代の団地映画においては必ずしも肯定的に描かれておらず、両義性を抱えていたことを明らかにしていく。第1章では、団地と結びつけられたサラリーマンが拒否される『喜劇 駅前団地』と『下町の太陽』を取り上げ、戦後の新しい価値観の担い手としてのサラリーマンに対する両義性を持っていたことを指摘した。第2章では、戦前の「家」制度の民主化として必要とされた核家族に合わせて設計された団地の間取りと、住まい方の実践に着目し、『しとやかな獣』が戦後の家族規範を問題化していることを明らかにした。第3章では、「戦災」の記憶を乗り越えるために、不燃性の鉄筋コンクリート造で建てられた団地から排除される『フランケンシュタイン対地底怪獣』のフランケンシュタインが持つ「戦争」の記憶に対する批評性を問題とした。

第Ⅱ部では、「団地族」から「団地妻」へと団地を象徴するイメージを転換させた「団地妻映画」を検討した。第4章では、団地妻映画の先駆けとしての『彼女と彼』を、子どもを持たない主婦が団地で排除されていることを問題化している作品として論じた。第5章では、日活ロマンポルノの団地妻シリーズで、初代団地妻を演じた白川和子主演の『団地妻 昼下りの情事』、『団地妻 しのび逢い』を分析し、「団地妻映画」が社会から隔絶され、孤立した「密室に籠もる団地妻」からの解放を模索する「団地妻」と会社に組み込まれた「団地夫」の夫婦が定型であることを指摘するともに、結婚して本物の団地妻になった白川が、団地妻イメージの起源として遡行的に発見されていく過程を明らかにした。第6章では、戦後史の語りから「団地妻」の語りを捉え直す。「団地族」から「団地妻」へという

団地イメージの語りが、戦後史の語りに組み込まれることによって、「団地妻」=「密室に籠もる団地妻」というイメージに固定化されていると指摘した。

第Ⅲ部では、団地という空間が映画において持っている批評性を問題にした。第 7 章では、若松孝二監督が団地を舞台にした『壁の中の秘事』、『現代好色伝 テロルの季節』を取り上げた。若松の「密室」を権力への抵抗として重要視している映画評論家の松田政男が中心となって提唱された「風景論」を歴史的に検討することによって、松田の「密室」と若松の団地には違いがあることを確認し、若松が団地をメディアに接続された空間として描くことで、「日常生活」にメディアが侵入している環境を問い直していることを明らかにした。第 8 章では、団地が登場する小説である安部公房『燃えつきた地図』と立松和平『遠雷』の映画化作品を扱う。団地文学が映画化されたことによって、生成される郊外化の歴史に対する団地映画の批評性を描き出した。第 9 章では、団地が舞台となった J ホラー作品『クロユリ団地』を音響と団地という空間に着目して分析し、人間と幽霊の境界を無効化する少女・明日香が女性表象に対する批評性を獲得していると指摘した。

団地映画は住宅としての団地だけでなく、サラリーマンや家族、郊外化、戦争の記憶、主婦など様々な事象と結びつきながら、特に 1960 年代には両義性を持った「憧れ」として団地を描き、団地が「日常生活」として浸透していく過程においては、そのことへの違和感を批評的に提示してきた。また、「密室に籠もる団地妻」のイメージと「団地妻映画」が相反するものであったにもかかわらず、ロマンポルノ言説において両者は結びつけられ、「団地妻」イメージの起源として「団地妻映画」が捏造されるとともに、戦後史の語りに組み込まれることによって、「団地妻」イメージは固定化されてきた。戦後の近代化を象徴する居住空間イメージとして多大な影響を持った団地映画には、直線的な戦後史の語りとは異なる、「日常生活批判」が内包されていたにもかかわらず、団地イメージの固定化された語りによって隠蔽されてきたことを明らかにした。